早稲田大学博士論文（概要）
2004
学位記 3908
文科省報告 (甲)乙 1981

博士（人間科学）学位論文　概要書

青年の学校適応への関係論的アプローチ

A relational theory approach to school adjustment in adolescence

2005 年 1 月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

大久保　智生

Okubo, Tomoo

研究指導員：　野嶋栄一郎教授

本論文では、学校適応の問題を関係論の視点から検討した。

第 1 章では、学校適応に関する先行研究を概観し、その問題点について検討した。まず、第 1 節で適応の定義を行い、学校適応に関する研究を①適応状態の測定に関する研究、②適応状態の予測に関する研究、③問題行動に関する研究の 3 つに分類した。第 2 節で、適応状態の測定に関する研究について概観し、適応感研究の問題点について検討した。第 3 節で、適応状態の予測に関する研究について概観し、個人変数と環境変数による適応状態の予測に関する研究の問題点について検討した。第 4 節で、問題行動に関する研究について概観し、問題行動を一義的に不適応行動としてとらえる視点、受動的非行少年観について検討した。

第 2 章では、第 1 章で明らかとなった問題点に基づき、関係論の視点から先行研究をとらえなおした。第 1 節で、相互作用論と関係論の差異について検討し、関係論という視点を明確にした。第 2 節で、個人—環境の適合性の視点から、適応感を、個人—環境の適合の感覚としてとらえなおした。第 3 節で、個人—環境の適合の良さ仮説に注目し、これまで行われてきた個人—環境の適合の良さ仮説を概観し、その問題点を検討した。第 4 節で、適応行動として問題行動をとらえる視点、能動的非行少年観について検討した。第 5 節で、本研究の目的を設定した。

第 I 部では、適応感がどのように規定されているのかを検討した。

第 3 章では、大学生の学校への適応感について検討した。

まず、従来の大学生用の適応感尺度とは異なる，環境と適合している時に生じる認知や感情に焦点を当てた尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討した。次に、個人と環境の関係の変化に伴う適応感の変化について検討した。その結果、大学環境における「居場所」の有無と適応感との間に明確な関連がみられ、適応状態の変化を測定する尺度としての妥当性が確認された。

第 4 章では、中高生の学校への適応感について検討した。

まず、これまでの学校適応感尺度を学校生活の要因ととらえ直し、中高生用学校生活尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検討した。次に，個人—環境の適合性の視点から，青年用適応感尺度を作成し，その信頼性・妥当性を検討した。そして、学校生活尺度と青年用適応感尺度を用いて、学校ごとに適応感の規定要因を検討した。その結果、3 つの学校生活の要因が一様に等しく適応感に対して正の影響を与えている学校はなかった。

第 5 章では、適応は欲求の充足としてとらえられることからも、青年を対象として、学校環境における欲求の充足と適応感との関連を検討した。その結果、3 つの心理的欲求の充足と学校への適応感の各側面との間に関連がみられた。

第Ⅱ部では、適応を内面性の問題としてか、関係性の問題としてとらえて予測・理解するのがよいのかを検討した。

第 6 章では、大学生を対象として、学校適応事例と学校不適応事例から個人—環境の適合性の視点が妥当であるかどうかを検討した。PAC 分析を用いて検討した結果、適応事例と不適応事例に構造と意味づけの違いがみられ、個人—環境の適合性の視点が妥当であることが示唆された。

第 7 章では大量調査によって、個人変数として心理的欲求に注目し、青年期における個人—環境の適合の良さ仮説の検証を行った。その結果、適合の良さ仮説は検証され、個人変数や環境変数からではなく、個人と環境の適合性の視点から適応の問題にアプローチする必要性が示された。

第 8 章では、第 7 章に引き続き、個人変数として学校生活欲求に注目し、中高生における個人—環境の適合の良さ仮説の検証を行った。その結果、第 7 章と同様に、適合の良さ仮説は検証され、個人変数や環境変数のみからではなく、個人と環境の適合性の変数から適応の問題にアプローチする必要性が示された。

第Ⅲ部では、問題行動は不適応行動なのか、適応行動なのかを検討した。

第 9 章では、問題行動と生徒の学校および家庭への適応感との関連について検討した。荒れている学校反社会的行動は適応的な行動であると考えられた。

第 10 章では、問題行動を起こす生徒の学級内における位置づけと問題行動の継続および生徒文化との関連を検討した。その結果、問題行動を起こす生徒が学級の受容されている学級ほど荒れており、問題行動を起こす生徒の活動に対して肯定的な評価を下す雰囲気があることが明らかとなった。

第 11 章では、本論文のまとめと提言を行った。適応の問題を内面の問題としてではなく、関係の問題としてとらえる必要性が示唆された。また、問題行動を適応的な行動ととらえる視点の有効性についての議論が行われた。

第 12 章では、今後の課題と今後の展望について検討した。今後の課題として、測定の問題や調査対象者の問題が論じられた。